淀川水系流域委員会
第9回猪名川部会（H14.2.15）
資料　６－２

猪名川部会中間とりまとめのイメージ

猪名川部会作業部会

猪名川部会中間取りまとめ目次（案）

要旨：　明日の暮らしを支える生き生きとした猪名川を目指して（仮置き）：

（猪名川の今後の方向に関する主張を1枚で簡潔にまとめる ）

本文：

はじめに

１．猪名川とは

○ 猪名川の特性、ポテンシャル

○ 課題、問題点

２．理念・目標

（１） 考え方（枠組み、スタンス･･･）

（２） 将来像（望ましい川の姿･･･）

（３） 目標

３．整備の方向

（１）総合的な対応

（２）災害への対応（治水、地震･･･）

（３）自然環境への配慮

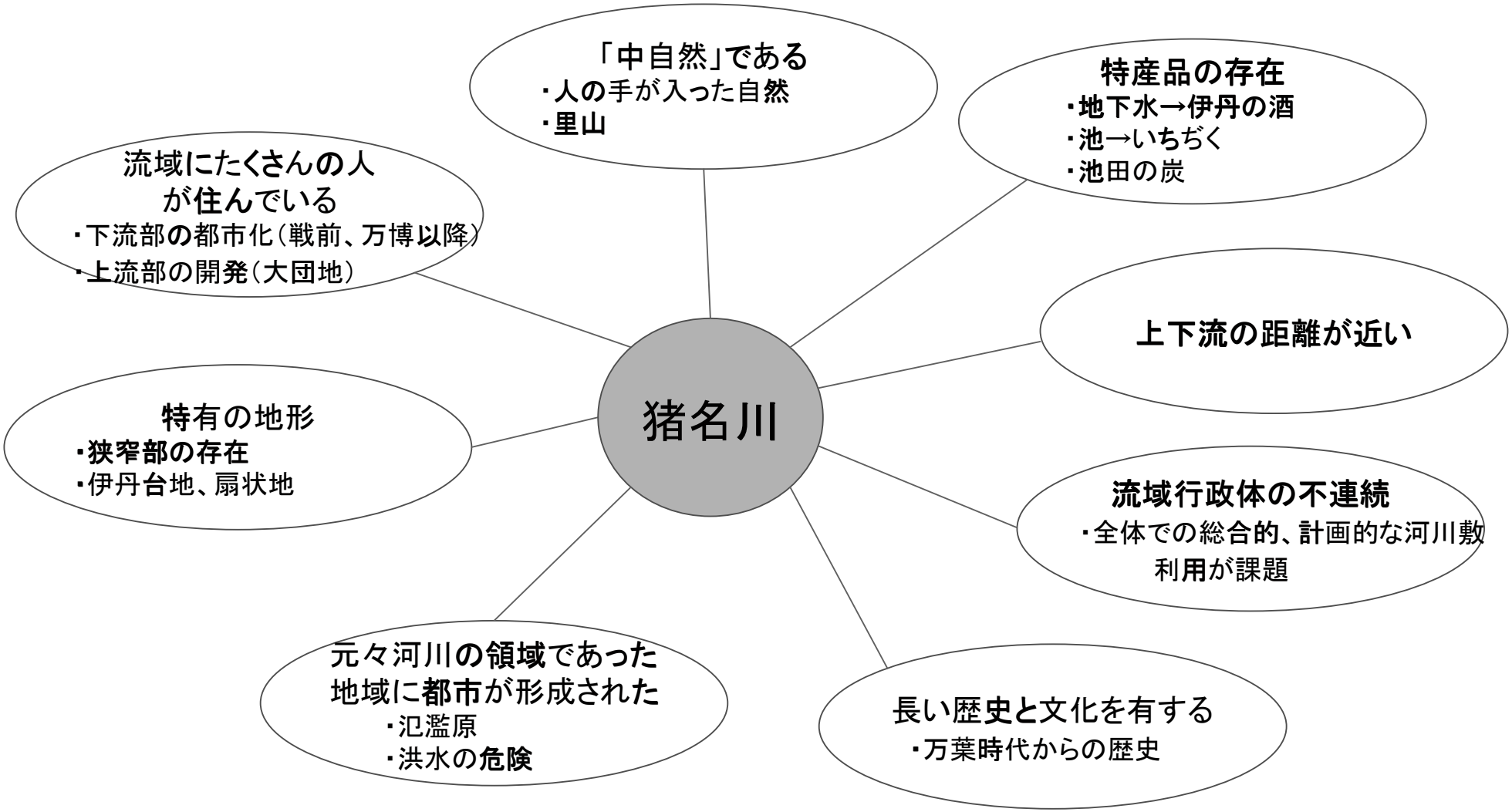
（４）社会生活への対応（利水、河川敷利用、ライフスタイル、教育･･･）

（５）推進の枠組みの変更（線から面へ、縦割りから総合へ･･･）

（６）役割、責務、リスクの分担のあり方

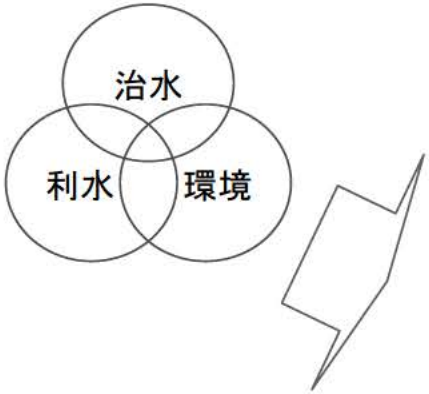
1. 猪名川とは：猪名川の特性、ポテンシャル

◆猪名川の特徴とはいったいなにか？

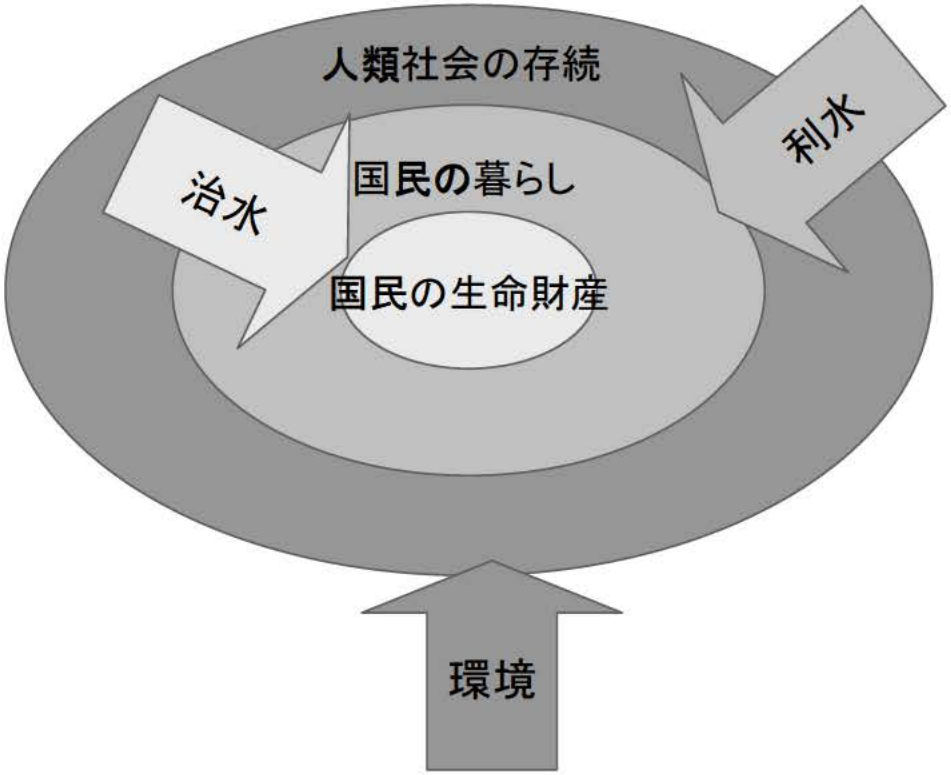


2. 理念、目標
(1)考え方　川と人とのかかわりの考え方(案A)

◆「治水・利水・環境」という枠組みの捉え方は正しいのか？　治水・利水は人間にとっての観点だが、環境は？　治水・利水・環境は並列にすべきものなのか？　それに取って代わる考え方の枠組みは何か？



すべては「人を守る」ことに通じる
すべては人間に返ってくる



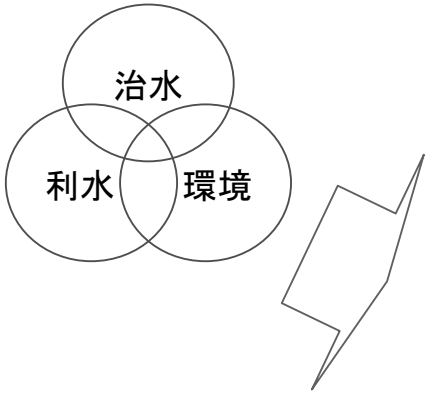
○治水は国民の生命財産を守る。

○利水は国民の暮らしを守る。

○環境は人類社会の存続を守る。

川と人とのかかわりの考え方（案B）

◆「治水・利水・環境」という枠組みの捉え方は正しいのか？　治水・利水は人間にとっての観点だが、環境は？　治水・利水・環境は並列にすべきものなのか？　それに取って代わる考え方の枠組みは何か？



「治水・利水・環境」から「人と自然」へ

＜人から自然への働きかけ＞
人の活動は必ず自然を抑制する。自然界のエントロピーを増大させる。それをいかに最小化・最適化するか。

環境（生活環境・社会環境・自然環境）

人（にとっての観点）

自然（にとっての観点）

＜人の安全・安心＞
・人の命
・人の財産

＜人の暮らし＞
・人の飲み水
・人の生業（漁業）
・人の活動（舟運）
・人の暮らし（利用）
・人のアメニティ
・人の教育
・人の文化
・

＜自然の回復・保全＞
・多様な生態系
・自然な変化
・土砂の供給
・自然浄化力
・水源から海域までの連続性
・
・

＜自然から人へのフィードバック＞
・自然から人への恵み
・自然から人への脅威
・自然から人へのワーニング

2. 理念・目標
（1）考え方　河川環境と社会生活の関係

◆河川の環境が悪化すると、いったい社会生活に具体的にどのような不具合となって跳ね返ってくるのか？

河川の自然をないがしろにすると人間の社会生活にどのような悪影響があるのか？

「河川の自然をないがしろにする」＝コンクリートで固める、変動・変化がなくなる、均質・一様にする・・・等

飲み水が汚くなる	水が飲めなくなり、海域水質が悪化し、食材に悪影響が出る。
気温が高くなる	植生の量、水の量、流れ方等が都市部の気温に影響を与える。
都市のアメニティが低下する	自然環境が不毛な都市は魅力が失せ、人がそこに暮らそうとせず、人が集積せず、文化や新しい産業が育たない。
子供が育たなくなる	自然との付き合い方を知らないために、いびつな子供が育つ。危機対応力が低下する。
生物の多様性が低下する	都市部で数少ない自然環境である河川環境は、都市での生活の安全性の指標・シグナルである。
水にまつわる文化が途絶える	コンクリートで固められ、水との触れ合いのない環境では、水にまつわる文化が途絶えてしまう。

２．理念、目標
（２）将来像

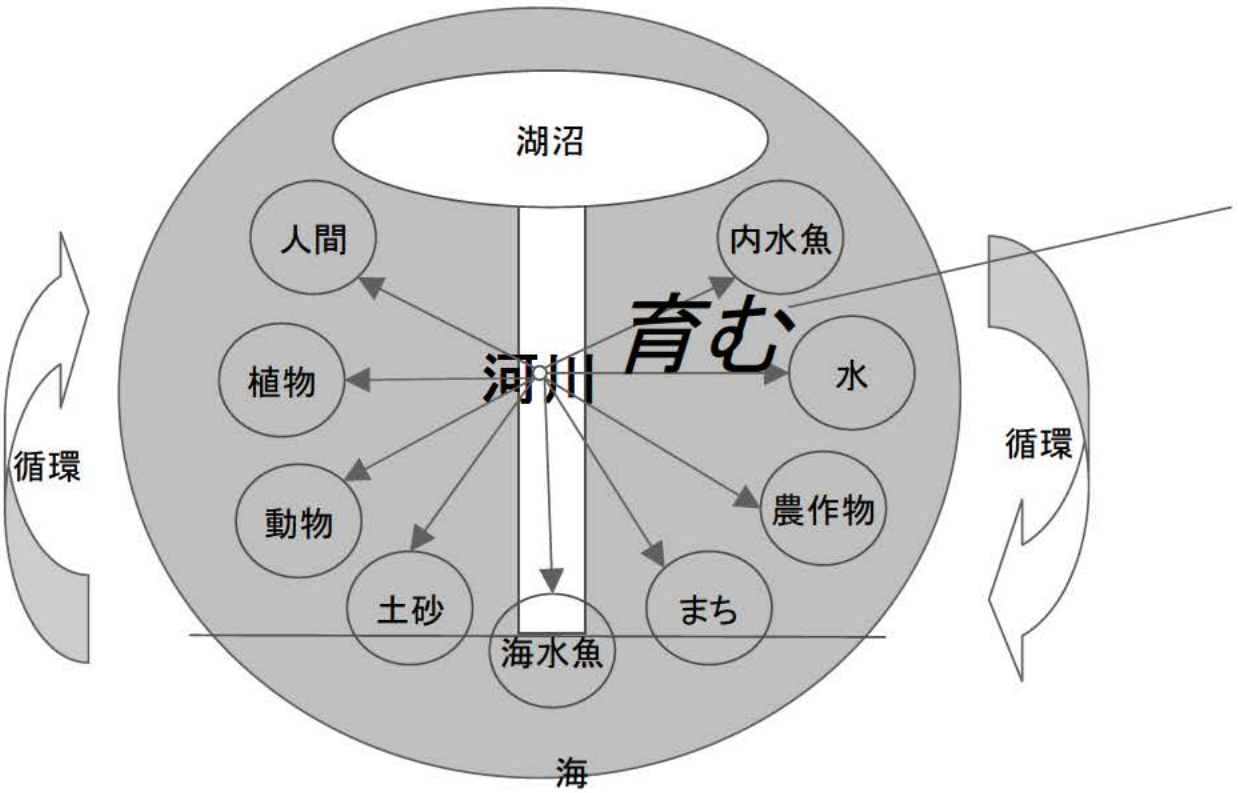
◆猪名川の将来像はどのような言葉で表されるか？

明日のくらし（生活）を守る豊かな猪名川	育む力・生産力のある川	川が田んぼや溜池とつながっている
入りたい川・遊べる川・人との触れ合いのある川	川からの発信がある	魚・鳥・虫が行き来するコリドーとなる
飲める川・触れる川	川からまちづくりを変える	蛇行し、瀬や淵の変化に富んだ川
源流から海までつながっている川、海が川を通じ山とつながる	生きがいを育てる川	自然の森を水源としてもっている川
そこの魚を食べられる川	「里川」	川の恐ろしさを知り川と付き合う知恵をもつことができる川
十分な河道幅を持ち川が自由に流れることのできる川	生き生きとした川	

（3）目標（案①）

◆そもそも人口3000万人の時代は、人々は河川の生産力に支えられて生きてきた。明治以降、特に戦後、この河川のもつ育む力（生産力）を減殺してきた。今後は、川のもつ育む力（生産力）を再強化する、という明確な目標をもつべきである。

これからは川の「育む力」を回復・強化する



＜育む力・生産力とは？＞
○水（水を浄化する力）
○河道・海浜（土砂供給）
○魚（内水魚、海水魚）
○農作物（米、野菜）
○植物（多様な植生）
○動物（鳥類、小動物）
○人間（おいしい水、学習、心、安らぎ、交流）
○まち（街のアメニティ）
○

（3）目標（案②）

◆人間はこの地球環境の中で生かされている存在であり、もはや人類の思いのままに反映を築くことができなくなった現状を知り、その環境から起こるすべての出来事と共生していく考え方がもとめられる。

短期目標→中期目標→ゴールへ

短期目標（整備計画）
（～30年）

ゴールに向かって確実に整備方針を実行する。
①本来河川領域であるところに住みついたことへの対応
②生物の多様性の維持
③人と川のつながり
④水需要に対するライフスタイルの変更

中期目標
（～50年）

ゴールを実現するために人々が川と関わるライフスタイルや価値観を変える。

ゴール
（100年～200年先）

充分な河道幅を持ち連続性のある多様な生物をはぐくむ親しみのある、歴史文化の継承のできる川を次の世代に伝える。明日のくらし(生活)を守る豊かな猪名川をめざす。

3. 整備の方向
(2)災害に対する対応(治水についての論点等)

◆作業部会で検討例(継続検討中)

基本認識

扇状地・沖積平野に住むわれわれは

洪水を完全に防ぐ(押さえることはできない)

方向性

壊滅的な被害を防ぐ

↓

浸水を前提とした対策へ

考え方の切り替え

レベル分けした対応策の検討

レベル1:完全に防止できる洪水のレベル:十分な河道幅の確保等

レベル2:軽度の浸水までは許容するレベル:土地利用による対応、適切な遊水地・保水地の確保、ハザードマップ等による立地選択

レベル3:コントロールは不能であり、とにかく人命の損失を避けるため避難するレベル:避難ルートの確立等

1生に2～3回浸かるくらいのレベル:洪水対処能力の育成(確率的な数値、表現は要検討)

・浸かり方の問題:広く、薄く分散させられるか、流域内の適切な遊水地に集中させられるか・適地はどれくらいあるか(etc大阪空港等)

・合意形成:このような考え方が本当に受容されるか、財産権の侵害は?

・情報の提供の仕方:浸かる危険のある土地の明示等

・破堤しない場合の状況のシミュレーション:どのような状況が想定されるか、どこが浸かるのか

・上下流の問題/補償　等

結論を出すまでにさらに詳細に検討すべき項目